

JGR
Level E



はやし
おん
林盤

原作 芥川龍之介「藪の中」

真話 酒井真智子

挿絵 馬越 智子

京都の北には山があります。

そして、その山のもっと北には
海があります。京都からその海まで
大きい道があります。それは人々が
海で取れた食べ物やめずらしい物を
京都の町へ運ぶ時、
北の町の人々が京都の新しいことや、
大切なことを知るために行ったり来たり
する時に通る道です。



もちろん京都は国の一番大切な町ですから、この北へ行く道だけではなくて、
たくさんの道が西へ、東へ延びていました。このように大きな町と町を結ぶ
道を街道と言います。

ある日、この北の街道の近くの山で働く人が男の死体を見つけました。
この人は山の木を切るのが仕事です。建物や橋を作るための木を切るのです。
この仕事をする人を木こりと言います。この木こりは死体を見つけると急い
で放免に知らせました。放免というのは今の警官と同じような仕事をする人
です。放免は死体を調べてみて、この男は誰かに殺されたようだと思つたの
で番所に知らせました。番所と言うのは今の警察と同じ様な所です。番所で

は侍が警察の仕事をしています。侍は簡単に言うと国や町の人々のために仕事をする人です。番所の侍は死んだ男の人が殺されたのかどうか、事故で死んだのかもっと詳しく調べるために、いろいろな人から話を聞くことになりました。話を聞くために番所に呼ばれたのは五人です。死体を見つけた木こり、この男が生きている時に街道で会ったお坊さん、泥棒を捕まえた放免、殺された男の妻の母親、泥棒の多襄丸です。

- 3 -

死んだ男の人を見つけた木こりの話

「ええつと、それは杉のたくさんある所へ木を切りに行くところでした。



私は木こりですからね

- 4 -

山で木を切つて町や村へ運ぶんです。

今は京都の東の方で大きなお寺を

建てていて、たくさん木が

必要なのだそうですよ。

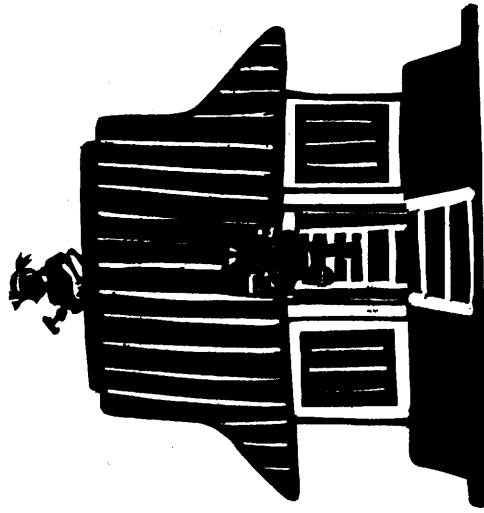
あ、いいえ、杉林の中ではありません、

男の人を見つけた場所は。街道から

山の中へ入つていくと竹の林があるんです。

その林は人がやつと通れるぐらいたくさんの竹があつて、それが高く伸びて

いるから昼でも光が入らなくて暗い所なんです。



私はいつも林の中で木を切っているのに、なんだか怖くなるくらい

暗くて気持ちが悪い所でなので、急いで通り過ぎるようにしているんです。

その竹の林を通り過ぎると少しだけ明るい所に出るんです。そこは低い木

がいっぱいある所で、お日さまの光が入ってきますから、ちよつとほつと

するんです。私が木を切る所は、もう少し先です。杉の林があつてその中

にあるんです。だけど、昨日は低い木のある明るい所で男の人を見たんで

すよ。初めは木の下で寝ているのかなと思つたんです。だけど近づいて見る

と古くなつた魚のような嫌な臭いがして、大きな蠅が周りを飛んでいるので

『変だな。』と思つたとたんに気が付きました。

『あつ、この男の人は死んでいるんだ。』それで
急に足がガクガク震えてしまいました。
でも私は死んだ人を見るのは
初めてではありません。木こりは
高い木に登つて切ることもあります
から、落ちて大怪我をしたり死んで
しまつたりすることもあるんです。
ですから段々に落ちて着いて男の人
を見るのが出来ました。上を向いて



寝ているようでした。

男の人は烏帽子をかぶつて、空色の着物とそれから袴をはいていました。
烏帽子は侍がかぶる物ですから、それでこの男の人は侍なんだと分か
りました。胸の所に刀のような物で深く切られたような傷がありました。
そこからたくさんの血が出たらしく、空色の着物が赤黒くなっていました。
お侍の周りに落ちていた木の葉にも血がついていました。」

「いいえ、刀は見ませんでした。お侍の倒れていた所に大きい杉の木が
あるんですが、その木の下に紐が落ちていました。

そうだ、思い出した、そのお侍からちよつと離れた所に櫛が落ちていた

んですよ。一本だけです。女の人が使う物だと思います。何でこんな所に女の人の櫛が落ちているんだろうと思っただんです。

変でしょう、だってあんな林の奥に

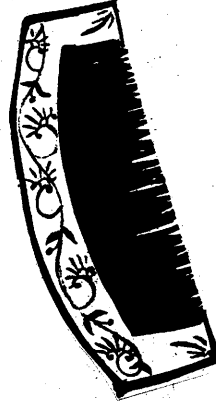
女の人はいきませんからね。」

「他に気が付いたことですか、

そうですね・・・えーつと、

お侍が寝ているように倒れていたんですけど、

それなのに周りの草や木の葉が足で蹴られたり、踏まれたり、倒されたりしていたんですよ。それを見ると、お侍は誰かと喧嘩をしたのか動き回った



りしたんじゃないかと思えます。切られて死んだのなら、苦しんでいたんでしようが・・・静かに寝ているようだったんですよ。」

「あつ、もう終わりなんですか、それじゃあ帰ってもいいんですね。ありがとうございます。私がこんなことを言う必要もないことでしょうが、あのお侍はまだ若いのに死んでしまつてかわいそうです。

目が開いたら、そのきれいな目に青い空が映つて気持ちよさそうに見たのではないのでしょうか。

もし誰かに殺されたのなら、早く殺した悪い人を見つけて下さい。」

「私ですか、いいえ、まだ仕事が終わらないので家には帰れません。この

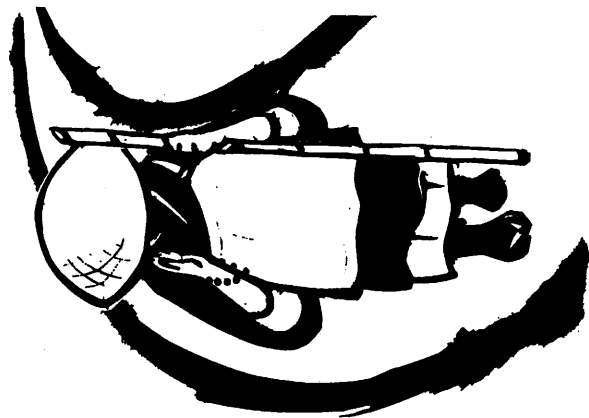
仕事が終わったら今度は南の方の山で木を切るんです。やはりそちらの大きな町でお寺を建てるそうで……。木が必要な所はどこでも行きます。それが木こりの仕事ですからね。それでは失礼いたします。」

木こりが帰った後、番所にはお坊さんが呼ばれました。北の街道を京都に向かって歩いていた時に、侍を見たというのです。お坊さんはお寺の人です。

お寺で人のこと、木や花や動物のこと、世の中のこと、神様のことを考えたり、勉強したりします。それからもつと世の中のことを知るために旅をしたりします。

山道を歩いていたお坊さんの話

「あのお侍さまには二、三日前に会ったばかりでございます。亡くなられたんですか、とても信じられないことです。殺されたかもしれないなんて……。おかわいそうなことでございます。」



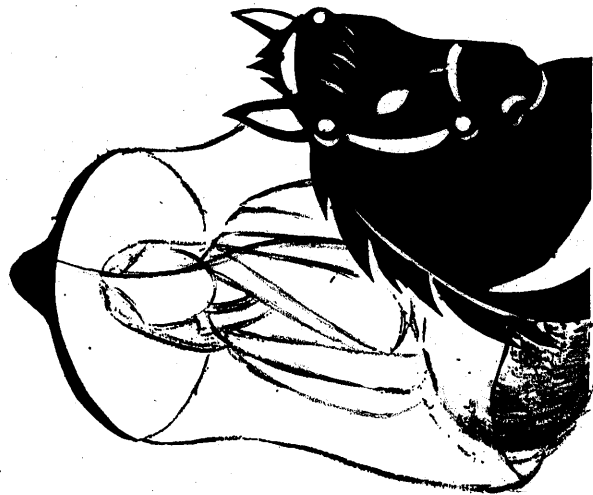
どうぞ静かな気持ちであちらの世界に行くことができますようにお祈り申し上げます。」

「はい、お侍さまに会ったのは一昨日のお昼ごろでした。会った所は京都の町から少し離れた北の街道です。私は北の山の方から町へ向かって歩いていました。道のそばには野菜や花の畑がありました。お二人は京都のほうから山へ向かっていらつしやいました。」

「はいそうです。お侍さまはお一人ではなくて馬に乗った女の人と一緒に歩いていらつしやいました。」

「お二人の様子でございませうか。お一人を見たのは本当に少しの間だけで

すからあまりよく覚えておりませんが、できるだけ思い出してお話いたします。女の方は旅行をする時の大きな帽子のような物をかぶっていました。



そして帽子の上のところから薄い布が掛かっていた。その布があるので

女の人の顔は見えませんでした。」

「着ている物ですか、そうでございますね・・・きれいな薄い緑色や黄色
だっただと思います。下のほうに赤い色と紫色もあつたような気がします。」

申し訳ありません、私は今、旅をしながら立派なお坊さんになる勉強を
しているところなのです。いつもお寺のことやえらいお坊さんのことばかり
考えて歩いているので、他のことに注意ができないのでございます。」

「馬ですか、馬の毛の色は少し赤い茶色でした。大きさは背中から足まで
が一メートルと三十センチぐらいだっただと思います。大人しそうな馬でした
よ。」

「刀ですか、お侍さまは刀を腰の左側に付けていました。」



弓と矢も背中に付けていました。矢は……、そうですね、二十本くらいあったと思います。」

「着物ですが、確か空色だったと思います。頭には何か黒い帽子をかぶっていました。烏帽子というのですが、そうですか、名前は知りませんでした。」

「お顔は若いきれいな、でも弱々しい感じではなかったと思います。そのぐらいしか覚えておりません。何しろほんのちよつとの間だけでしたから。」

「申し訳ございません、あまりお役に立たなくて……。」

お坊さんの話はこれだけです。

番所を出てからお坊さんは『あんなに若くて立派なお侍さまが亡くなつ

てしまうなんて、本当に人の命は朝開いて昼には落ちてしまう花のようなものなのだなあ。生きている時間と夢の時間は同じようなものなのかもしれない。でもそれを悲しいと思うのはまだまだお坊さんの勉強が足りないからなのだろう。』などと独りで言いながら山の方へ歩いて行きました。

三番目に番所に呼ばれたのは放免です。初めにも説明しましたが、放免というのは今の警官のような仕事をする人です。

この放免は泥棒を捕まえました。泥棒の名前は多囊丸といいます。多囊丸は京都の北山で人の物を盗んだり、刀を振り回してたくさんの人に怪我をさせたり、家に火をつけたり、人を殺したりしているので怖がられていました。

ですから捕ま^{つか}ったと聞^きいた人々は驚^{おどろ}き、そして喜^{よろこ}びました。

多^た襲^{しやう}丸^{まる}を捕^{つか}まえた放^{ほう}免^{めん}の^{はなし}話^わ

「多^た襲^{しやう}丸^{まる}を捕^{つか}まえることができたのは運^{えん}がよかつたからなのです。あの男^{おとこ}は怪^け我^がをしていましたからね、馬^{うま}から落^おちたよう^{よう}で動^{うご}けなかつたんです。骨^{ほね}でも折^おれているでしょう。

あの泥^{どろ}棒^{ぼう}は、北^{きた}の街^{かい}道^{どう}を旅^{たび}する人^{ひと}から荷^{にも}物^{ぶつ}を取^とつていたんです。あそこは京^{きやう}都^とから北^{きた}山^{やま}の向^{むか}い^への海^{うみ}の町^{まち}まで続^{つづ}いている道^{みち}ですから、大^{たい}切^{せつ}な物^{ぶつ}が運^{えん}ばれます。多^た襲^{しやう}丸^{まる}は力^{ちから}も強^{こわ}く乱^{らん}暴^{ぼう}ですから、人^{ひと}の荷^{にも}物^{ぶつ}を取^とるのは簡^{かん}単^{たん}でした。

その上^{ええ}、頭^{あたま}がよくて走^{はし}るのが速^{はや}かつたのでなかな^なか捕^{つか}まえられなかつたんです。昨日^{きのう}は、近^おくの村^{むら}に住^すんでいる人^{ひと}が誰^{だれ}か怪^け我^がをして動^{うご}けないでいるから見^みてくれと知^しらせて来^きたん^です。それで、行^いつて見^みると村^{むら}の近^おくの橋^{はし}の上^{うえ}で怪^け我^がをして苦^{くる}しんでいる男^{おとこ}がいたんです。顔^{かお}を見^みて驚^{おどろ}きました。



捕まえようと思つてもなかなか捕まえることが

できなかつた多襄丸だつたんです。ずいぶん

汚れた着物を着ていましたよ。

紺色だつたと思います。

刀を持っていました。古いけれど

よく切れそうな刀でしたよ。

それから弓と矢も持っていたんです。

弓には革が巻いてあつて、りっぱな

物でした。矢は十七本ありました。



きれいな鳥の羽がついていました。

これは多襄丸の物ではない

と思いましたよ。きつと誰かから

盗んだに違いないですよ。本当に悪い男だ。」

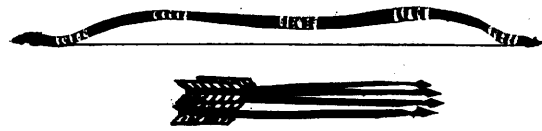
「はい、馬もいましたよ。橋のそばで草を食べていました。色は少し赤い

茶色でした。その馬から落ちたのかな。たぶんその馬も多襄丸が誰かから盗ん

だ物なんでしょう。盗んだ馬から落ちて大怪我をして捕まってしまうなんて、

はつ、はつ、はつ、悪いことをすればいつか悪い結果が返ってくるんでしょ

うね。」



「お侍さま、京都には他にもたくさんの泥棒がいます。でも多襄丸はそ
中でも一番悪い泥棒だと言つてもいいぐらいです。

この男は女の人に乱暴をするのが好きなんです。

去年の秋でしたが、

京都のお寺に来た若い母親と

その赤ん坊が殺されたことが

あつたんです。多襄丸が

その場所から逃げて行くのを

見た人がいるんです。



母親は乱暴されても赤ん坊を守ろうとして、刀で切られたようです。胸に

小さな赤ん坊を抱いて死んでいる様子は、本当にかわいそうでした。いろい

ろな事件を見ている私でも涙が出てしまいましたよ。昨日、仲間の放免が

お侍さんの死んでいるのを見たと言っていました。多襄丸が持っていたの

はそのお侍さんの弓と矢ではないのでしょうか。前の日には女の人と一緒に

だつたそうですね。多襄丸がやつただつたら、徹しく調べて女の人を探し

てください。私も急いで山の方へ戻つて探してみましよう。」

放免が帰つた後、番所に呼ばれたのは中年の女の人でした。この人は死ん

だ侍と一緒に歩いていた女の人のお母さんです。

番所の侍は持ち物に書いてあった侍の名前から、知っている人を探したところ、侍の妻の母親が京都に住んでいることが分かったのです。

侍と歩いていた女の母親の話

「そうでございます。あの方は武弘様でございます。去年私の娘と結婚した武弘様です。どうして・・・どうしてこんなことになったのでしょうか。娘は、娘の方はどうなったのでしょうか。死んだのでは・・・。」
娘の夫が亡くなったのですから、すぐには落ち着いて話すことができませんでした。しばらくして番所の侍の質問に答えて話し始めました。

「はい、あの方は金沢武弘様でございます。いいえ、京都の方ではございません。北山の向こうの若狭の国の侍でございます。

年は二十六歳でございます。

金沢家は若狭ではとても古い立派な家で、お父様は国の大切な仕事をなさっていらつしやいます。

武弘様も優しく、真面目な方です。娘もそう言っております。お友達もたくさんいて誰も悪く言う人はいません。刀も上手に使える方でした。でも刀を使って喧嘩をしたり、人と競争したりすることが嫌いなようでした。それで、刀の試合の時など気持ちが優し過ぎてどうしても勝つことができな

「いのだそうです。娘はいつも残念だと言っていました。」

「娘でございませうか。娘は真砂と言います。歳は十九歳でございませう。」

小さい時から元気で気が強く、主人も真砂の兄達も『真砂は男の子だったらよかつたのに』と言っていました。

武弘様との結婚の時も、他の娘さんたちは御両親が決めた方と何も文句を言わずにお嫁に行きますのに、真砂は自分で決めたのですよ。お友達のお兄様の出られた馬の競走会で会つたのだそうです。

娘はその競走会から帰つて、武弘様と結婚したいと申したのです。私たちは驚いたのですが、どうしたことが、武弘様も面白い娘さんだと気に入つ

てくださつて、とうとう結婚することになつたのが去年でございませう。

本当に幸せそうな一人でしたのに……。」

母親はまた思い出して泣き出したため、話すことができなくなりました。

「すみませう。娘のことが心配でございませう。はい、顔は卵のような形で小さいです。」

番所の侍は林の中に落ちていた櫛を母親に見せました。

「あつ、それは真砂の櫛です。どこで……。結婚する時に私があげた物です。一昨日京都から若狭に帰る時、付けておりました。

一人は若狭に住んでいるのですが、武弘様が仕事のためにしばらく京都に

来ていらつしやいました。娘も一緒でした。仕事が終わって若狭に帰るところでございました。

武弘様が亡くなつてしまつて、真砂は生きていますのでしょうか。どうぞ娘を探してください。何があつても娘が生きて私達の所へ帰つて来ることを願つております。」

真砂の母が泣きながら帰つて行くと、番所には泥棒の多襄丸が連れてこられました。大怪我をしていて歩くのも大変そうです。

多襄丸の話

「痛い、痛い。俺が馬から落ちるなんて何ということだ。こんなばかごとになるなんて。あの馬は俺を乗せるのがどうしても嫌だと言っているようにひどく騒いだんだ。だけど、今まではどんな馬でも俺の言うことを聞いて、大人しくさせる自信があつた。それなのに気が付いたら落とされていたんだ。」

「いたたたた……。あの馬は乗る者を選んでみるみたいだ。」

「そうだよ、あの侍を殺したのは俺だ。本当だ。でも女は知らない。どこかへ行つてしまった。殺してはいない。」

「どうして侍を殺したか、ようし、聞きたいのなら話してやる。」

一昨日の朝、天気がいいし、涼しい風が吹いていて、俺はなんだかひどく気分がよかった。そんな時に、あの二人に会ったんだ。」

「どこでかつて。京都の北へ行く街道だ。女は旅の笠をかぶっていて、その笠の上から薄い布を掛けていたから、顔が全然見えなかった。

二人が俺の方に近づいた時、急に風が吹いてその薄い布がふわっと上がったんだ。それでちよつとだけ女の顔が見えたんだ。すぐに風が止ったからあつと言う間に見えなくなってしまった。あの風が吹かなかつたら女の顔を見ることもなかった。

だけどその顔は女の神様のようなだった。女神様だぞ。女神様は侍でも、

俺のような人間でも同じように優しくしてくれる母親なんだ。

母親のように温かく抱いて包んでくれるんだ。

女神様は一人の男のものじゃない。

俺のものでもあるんだ。そんな女は

なかなか見つからない。

やつと会うことができたんだ、

だから俺のものにすると決めた。

男の方はどうでもいい。邪魔なら殺してしまってもいい。殺すことは簡単だ。刀で命を取る、それが殺すことだ。



ところが、侍や金持ちは金の力や嘘の言葉で人を殺す。汚い、汚い。
金をたくさん持っていて嘘をつくのが上手な者が、町のなかで一番強い者になるんだ。血も流れないし、命も取らない。しかし、そうやって金や嘘の言葉で殺された者はずっと苦しむんだ。体が死ぬまで、恥ずかしさや残念な気持ち
ちが長い間、心を苦しめるんだ。

「刀で命を取るのとどちらが悪いことなんだ、俺にはよく分からない。」
多襄丸は番所の侍にそう言つて答えを聞いているようでしたが、侍たちは早く話を進めるように言いました。

「分かった、分かった。どうして殺すことになったか、初めから順番に話

していくから待て待て。

「一昨日の朝は女だけ俺のものにすればいい、男は殺すことはないと思つて
いた。だけど、あの街道では人が通るからだめだ。ずっと遠い山の中へ二人
を連れて行つて、そこで女を取つてしまおうと思つた。」

「どうやって二人を山の中へ連れて行こうか。俺は考えた。泥棒だつて頭を
使わないとすぐに捕まってしまうからな。」

しばらく考えて、俺は二人に近づいた。そして、できるだけ丁寧に話しか
けたんだ。『あの、お侍さん、私は山で仕事をしている者なんですが、先日
あの山のむこうで古い墓のような物を見つけたんですよ。どのぐらい古い物

なの、誰の物なの、か知りたくなりました。実は私は昔は侍だったんですよ。そこには家に古い刀や鏡があつたので、興味を持って勉強したんですよ。今はこんな山の中でさびしい生活をしなければならなくなつたのですがね。』とね。

二人は初めは黙って歩いていただけけれど、俺が侍だったと聞くと、話に関心をもち始めたんだ。

『私は墓の周りをちよつと調べてみたんです。そうすると、土のなかから古い刀や



お金のようないろいろな物がたくさん出てきたんですよ。

これはゆつくり調べた方がいいと思つて

土や木の葉を掛けて置いてきました。

お侍さん、もし興味がおありなら見て

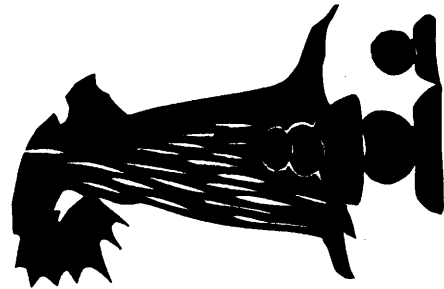
いただけませんか。勉強した

といつても少しだけだし、

出てきた物がたくさんあつて一人では

大変なんですよ。見ていただいて、お侍さんがお好きな物があつたら、

持つて行つてもいいですね。全然ためなら私も諦めますがね。』と。



俺がそう言うと、あの侍はとても興味を持ったようで、一緒に行つてみようと言ふんだ。ほら、人間なんて皆同じさ。金になることが嫌いじゃないんだ。きつと心の中で汚い男をだまして、価値のありそうな物をいただいて、京都で高く売つてやろうと考えたんだ。

そうなれば後は簡単。俺は侍と女神様を一緒に山の中へ連れて行つた。山道の途中まで女は馬に乗つて行つたんだ。

だけど、竹の林の所まで来るともう馬は進めない。竹がたくさんあつて道もないんだ。それに昼でも暗いから女は気持ちが悪くなつたんだろう。

『私はここで待ちます。どうぞお一人で行つてください。』

女がそう言うと侍は

『そうしなさい。ここで待つていなさい。できるだけ早く戻るから。』と言ふんだ。俺もその方がいいから黙つていた。

侍は女をこんな所に一人で残して危なくないのか、なんて考えてもいないようだった。どんどん進んで行こうとするんだ。

ここは俺の庭のような所だ。侍はもう俺にとって捕まえた手の中の鳥のようなものだ。二、三十分も歩くと、竹が少なくなつて背の低い木や草の所に出た。

侍はまだなのかと聞くようにこちらを見た。

俺は『そうです、もうすぐです。あの杉の木の下あたりです。お墓があるのはあそこです。』と言うと、侍は走って杉の木の下へ行った。『墓はどこなんだ。』と見回して俺のことを注意していない。

俺は侍の後ろから近づいて、両方の腕を捕まえた。侍は急に後ろから抑えられて腕を取られたので、何もできない。

あつと言う間もなく杉の木に侍の体を縛り付けてしまった。

俺は泥棒だからいつでもこの紐を



持っているんだ。金持の家に入る時高い壁を登らなければならないし、家の中で高そうなものを探したり、盗んだりする間、家族の者達を縛らなければならないこともある。

大きな物を盗む時には運び出すのに紐が役に立つしな。

侍は、突然縛られて何がなんだか分からない。



『どうしてだ、どうしてこんなことをするんだ。嘘をついたのか。なぜ

なんだって嘘をついたんだ。』と叫んだ。

俺は『どうしてだつて。すぐにわかるさ。ちよつと待つている。』と言いな
がら、大声が出せないように侍の口に木の葉をいっぱい押し込んだ。こん
な林の奥でも誰かが近くを通ることもあるからな。」

「そうやって、俺は女の所へ戻つて言った

『御主人が急におなか痛くなつて苦しんでいる。歩く事もできないよう
だから来て見てあげてくださいよ。急いで、急いで、こっちですよ。』

女は暗い林の中を一生懸命走つて俺について来た。俺が泥棒だなんて
全然思つてもいまいやうだ。何回も転んだり、木の枝が顔に当たつたりした

けれど、気にもしないで進んだ。

だけど、あの場所まで来て

自分の夫が杉の木に

縛られているのを見て、

すぐに何があつたのか

分かつたんだろう。女神だつた

はずの女は胸の所に

隠していた小さい刀を出して、俺の方に向かつてきた。

俺は簡単に横に逃げたんだけど、女は



何回も、何回も俺を刺そうとするんだ。

今まで女が俺に向かってくる事なんかなかった。

どうしたって俺に勝つことなんかできないのにさ。

朝には女神のように優しくあった顔が、今は怖い女の地獄の神のようだ。

だけど、俺が女の手から刀を取るの簡単さ。あつと言う間に左の手で女の両方の手を押えてしまった。俺の手を離そうと動けば動くほど、女は自分の手や肩が痛くなるんだ。それで今度は大きな声で何か叫んでいたんだが、気にもならなかった。

そうしてついに侍の見ている前で女を自分のものにしたんだ。侍は木

の葉が口の中に入っているから何も言えない。殺さないで侍の妻を取ることができたんだ。これで俺の欲しいものは手に入れた。もうこの二人に用はない。すぐに林の外へ逃げようと思ったんだよ。」

ここまで多襄丸はとても速く話していましたが、急にゆつくり真面目な顔になって、黙ってしまいました。その時のことをちよつと思ひ出して考え込んでいるようです。

「ううん、俺はなんだか女がよく分からなくなりました。」と言ってまた、多襄丸は話し始めました。



「俺が走り出そうとすると

急に女が俺の手を取って言ったんだ。

『待つてください。私をここに

置いて行かないで下さい。

お願いします。あなた様か主人か

どちらかここで死んでください。

私が二人の男のものになったままでは

生きていくことはできません。

このまま生きていることは死ぬより



苦しくて恥ずかしいことごとあります。どちらかが死んで、残った方と夫婦にならなければなりません。どうぞお二人で決めてください。』

俺は驚いた。ただこの女と夫婦になれるんだ。よし侍を殺してやる。自分の妻がこんなことを言うなんて、侍はどう思っただろう。とにかくその時は、速くこの男を殺してしまおうと思った。

こんなことを言うと『やっぱり多量丸はひどい奴だ。』と思うかもしれないが、あの時あの女の目を見た者はきつと誰でも俺と同じように思っただけだ。女の目は火が燃えているように熱く光ったんだ。その光は俺の胸を刺したのかと思っただくらい熱くなって痛かったんだ。この女を妻にできるのなら、

その熱い光に刺されて死んでもいいと感じたんだ。他の女だったら足で蹴
つてやっただろう。そして逃げてしまえば、侍と女がどうなっても俺には
関係ないから男を殺さなかつたし、このように捕まったりもしなかつた。
ただあの女の目の熱い光を見た時、すぐに男を殺そうと思った。けれど
紐で縛ったまま男を殺すのはよくない。紐を切つて刀で試合をしよう。俺が
勝つのは分かっているけれど・・・男らしいやり方で殺そう。そうだろう、
ここにいるお侍さんもそう思うだろう。

それで侍に言った。

『どちらが生きるか死ぬか刀で決めよう』

俺は紐を切つて、刀を渡そうとした。すぐに侍は立つて口の中の木の葉
を取り出してから大きく息をして、刀をつかんだ。

試合の結果は言う必要もないだろう。

侍は刀を上手に使つた。二十三回、

俺の刀と侍の刀が正面で

ぶつかり合った。そして

俺の刀が侍の胸を深く刺した。

二十三回、これは大事な点だ。

俺は今までに刀の試合を何百回



もやった。もちろん一回も負けたことはない。

その試合のなかで、二十回以上俺の刀と

正面でぶつかり合ったのは

この侍だけだった。この侍は

刀の使い方がすごく上手だったんだ。

強かったんだ。

俺だって強い侍から奥さんを

取ったんだから、気分がよかった。

嬉しかった。



ところが、さあ一緒に行こうとすると、女が

いないんだ。周りを見てもどこにも

いないんだ。杉の木の反対側を見ても

竹の林の暗い方を見てもいない。

走る音でも聞こえるかと思つて

静かにしてみたが何も聞こえない。

侍の喉がごろごろ言っている。

それだけが聞こえる。その音も段々小さ

くなっていく。もうすぐ死ぬのだから。



そうか、女は誰かに助けてもらおうと思って、今ごろ町の方へ行っただのか
もしれない。このままここにいたら放免や町の男達が俺を捕まえようとして
来るかもしれないぞ。危ない、危ない。

そう思ってすぐに自分の刀と

侍の弓矢と刀を取って

街道の方へ走って行った。

ここから北の山の方へ逃げようとするぞ

あの女の馬がのんびりと道の草を食べていたんだ。

急いでこの馬に乗って逃げようと思った。



「けど・・・もう話す必要はないな。」

「刀と弓矢はどうしたのかって聞くのか。それは馬に乗って逃げようとする
前に捨てたんだ。」

これで全部だ、俺の話は。嘘はない。俺はいつかは捕まって、首を紐で縛ら
れて木の枝から下げられるんだ。嘘をついても仕方がない。怖いものも何
もない。」

多襄丸が侍を殺した。番所の侍はこれでこの殺人事件は終わったのだ
と思いました。

しかし金沢武弘の妻はどうなったのでしょうか。

しばらくしてその妻が見つかったと言う知らせが来ました。

清水寺で肩を落として座っていたのだそうです。

お寺の人が話し掛けると急に泣き出して、

「夫を殺してしまった、私も死にたい。」

と言っているらしいのです。

驚いた寺の人が番所に知らせて来たのです。

侍たちは、金沢武弘の妻が無事に見つかつて

よかつたと思つたのに、今度はその妻が

夫を殺してしまったと言っているのですから



「どちらの言っていることが本当なのだらう。」と悩んでしまいました。「ど

にかく、その女をここに呼んで話を聞いてみよう。」ということになり、金沢

武弘の妻が番所に呼ばれました。

清水寺にいた金沢武弘の妻の話

「わたしは夫を殺してしまいました。夫の名前は金沢武弘と申します。若

狭の侍でございます。どうして殺したのかお話しします。その後で私も死

にます。あの汚くて乱暴な男が悪いのです。あの男に会つて、あの男が嘘

をついたから私は夫を殺すことになってしまったのです。あんな男に街道

で会わなければ……。」

そう言つて金沢武弘の妻は泣き出しました。しばらく泣くのを黙つて聞いていた後、番所の侍はどうして夫を殺したのか話すように言いました。

「男は古くて汚れた着物を着ていましたが、前には侍だつたと言つていました。たぶんそれは嘘だらうと思います。今は分かります。

その時は夫と一緒にしたから、あの男に疑いを感じませんでした。けれども悔しいことですが、あの男はとても頭がいいのです。私たちは簡単に男の嘘の話を信じてしまつたのですから。

乱暴な力と、嘘の話で男は私を夫から取つてしまつたのです。

一生懸命に止めさせようと戦つたのですが無理でした、私の力では。男の大きな手の中の小さな虫のようなものでした。虫を動けなくするのは本当に簡単だつたでしょう。男はにやにや笑いながら夫を見ました。『どうだ、悔しいか、残念だらうな』と言つているようでした。

夫は口の中に木の葉を入れられていて、木に縛られていたのですから、何も言えませんし、体を動かすこともできませんでした。私は夫のそばに走つていったのですが、乱暴な男は私を足で蹴つたので転んでしまいました。とても痛くて涙が出てきましたから、思わず夫の顔を見上げました。けれどその時夫の目は冷たい氷のように光つたのです。『真砂、お前はあの汚い

男のものになってしまった。もう汚れてしまったんだ。

私のそばに来るな。』

夫の目はそう言っていました。

夫はもう私のことを

かわいそうだと思っていない。

悲しんでもいません。

氷のように冷たい光が

私の胸を深く刺して、その激しい痛さで死んでしまったように何も分からなくなりました。



そのまま、どのくらい時間がたったのか分かりませんが、気が付くと、青い空が林の上に明るく見えました。小鳥がきれいな声で鳴いていました。

すぐにはどこにいるのか分かりませんでした。何が起ったのか思い出して、急いであの乱暴な男を探したのですが、どこにもいません。でも夫はまだ杉

の木に縛られたままでした。さっきと同じように冷たい目で私を見ているのでございます。その目が私の悲しさ、恥ずかしさ、悔しさをもう一度感じさせました。

私は武弘様に大声でお願いしました。

『もう武弘様とは一緒にいられません。このようなひどいことになってしまつて、私には死ぬことしかできません。武弘様は私があの乱暴な男に汚

されるところを見てしまいました。こんな恥ずかしいところを見られたので
す、どうぞあなた様も死んでください。武弘様が生きていては、私は安心して
死ぬことができません。お願いでございます。どうぞ死んでください。』

私が一生懸命頼んでも夫の目はやはり冷たいままです。また先ほどのよ
うに、冷たい氷の光が胸を刺して痛むのです。本当に血が流れているので
はないかと思うぐらい痛かったです。夫に死んでもらわなければ、この痛
さは無くならない。そう思つて夫の刀を探しました。しかし刀はありませ
んでした。弓矢もありませんでした。

多分あの男が持つて行つてしまつたのだでしょう。間違いありません。

それで私の小さい刀を使うことにしました。

胸の所から小さい刀を出して、

『ではあなた様の命を取ります。

そしてその後で私も死にます。

待つていてください。一緒に

死の世界へ参りましょう。』

と申しました。夫は何も言えませんでした、

私には分かりました。『早く殺せ』

そう言いたかつたのです。



夫の胸のあたりを着物の上から力いっぱい刺しました。刀がどこを刺したのか、夫がどうなったのか分からないうちに、気が遠くなってしまいました。気が付くと、夫は息をしていませんでした。死んだのです。胸の所には私の小さい刀が刺さっていました。夫の青白い顔に西日が当たっていました。風が吹くと木の葉の影がゆれて、なんだか夫は生きてるように見えました。

殺してしまったのに、私は夫のきれいな顔を見てほっとしたのです。変な気持ちです。でも急に悲しくなりました。涙が出てきました。声を出さないうように泣きました。泣きながら体を縛っている紐を切りました。刀を胸か

ら取って、口の中の木の葉を出してさし上げました。それで少しでも夫が苦しくなくなるような気がしたのです。

今度は私が自分で死ぬ番でした。でも、もう力がなくなって、死ぬことができなかったのです。喉を刺そうと思ったのですが、刀を持つ力もないのです。立つのもやごとでした。林の中をふらふらしながら歩きだしました。足が重くて、少しでも高くなった所には上がれませんでした。気持ちも弱くなってしまうたのです。池があつたのですが、水の中に入る勇気もありませんでした。

それでこのようにまだ生きています。

夫が『そばに来るな』と言っているのでしょうか。

『乱暴なあゝの男のものになつたのだから、もう真砂は私の妻ではない。』
そう言いたいのでしょうか。汚されたまま私は生きていかなければならない
のでしょうか。どうやって生きていけばいいのでしょうか。』

番所の侍たちは困つてしまいました。多襄丸は「侍を殺したのは俺だ。」
と言っていますし、侍の妻も「夫を殺したのは私です。」と言っているの
です。しばらく迷つてどうすればいいか話し合つたり、他の番所の侍達の意
見を聞いたりしていました。

すると、一人の侍が言いました。

「北の方に巫女がいる。

その巫女は死んだ人の心を死の世界から

呼んで来て、巫女の体の中に

その心を入れることができるぞうだ。

そして死んだ人が生きている時に

話したかつたこと、思つていたことを

自分の声を使つて伝えることができるんだぞうだ。」

他の侍達もそれを聞いて、「一度その巫女を呼んで死んだ男の話の話を聞いて
みたらどうだろう」と賛成しました。



巫女が死の世界から呼んだ侍の話

巫女というのは特別の力を持っている女の人です。死の世界から死んだ人の心呼んで来るのです。そしてその心を自分の体の中に入れて話をさせることができます。

生きていたら話したかったこと、誰かに知らせたいことを巫女の声を使って話すのです。それでこの侍の話は、巫女が死の世界から侍を呼んで巫女の声で話したことなのです。

「あの嘘つきの男が私の妻、真砂を乱暴に取ってしまったのです。残念だ



けれど私は簡単にあの男の嘘にだまされた。林の中に古い墓があるという話にうっかり興味を持って、真砂を取られてしまったのです。私は杉の木に縛られてしまつて何もできないうで、ただ見ているだけでした。

とても残念で、苦しくて、目を開けているのもやつとでした。でも真砂が無事ならいい、生きていればいいと思っていました。男が行つてしまえば、また二人は元のように夫婦なのだから。そう思っていたのに、あの男は乱暴なことをした後で、下を向いて黙っている妻に近づいている話しかけるのです。優しいような声で何か言つてまた妻をだまそうとしているようでした。私は口の中に木の葉をいっぱいに入れていましたから、声を出すことはできませんでした。それでも、一生懸命に妻の方を見て目で知らせようと思いました。

『だめだ、こんな男の話は信じてはいけませんよ。この男の言うことは全部』

嘘だ。真砂、この男がどんなに優しいことを言つても嘘なんだからね。』

できる限り大きな目を開いて、真砂の顔を見ました。

私の気持ちが伝わるように

一生懸命見ました。

しかし真砂は下を向いて

私の方を見ません。

それどころかあの男の話を

じつと聞いているようなのです。

そして、だんだん男の話を



信じ始めているのです。

『だめだ、真砂、だめだ。嘘なんだからそんな話は。』

でも、真砂には私の心の声は聞こえませんでした。真砂は私の方を見ようとしません。男は私にも聞こえるように大きな声で言いました。

『一度だけでも妻が他の男のものになったら、普通の男は誰でも妻が嫌いになる。その上、自分の見ている前でそんなことになったら、妻を殺したくなるかもしれない。お前の夫は今どんな気持ちだろう。多分、嫌いになっただろうな。お前だつてもう恥ずかしくて一緒にいることはできないだろう。お前は俺と一緒にどこかへ行つた方がいいのではないか。夫婦になつてもい

いんだ、俺は。始めて見た時、お前が好きになつたんだ。本当は乱暴なことをしたくはなかつたんだ。俺はもつと優しい男なんだ。』

こんな嘘をついたのです。そしてこれを聞いて真砂はとても嬉しそうにあの男の顔を見たのです。

私は驚きました。真砂のあんなに嬉しそうな顔を見たことはありませんでした。私は信じられませんでした。さらに真砂は木に縛られている私の前で言いました。

『どうぞ、連れて行ってください。どこくでも一緒にまいます。お願いいたします。』

私はもう死の世界にいるのです。それでも

この真砂の言葉を思い出すと、

激しく嫌いなのだと感ずます。妻は

うれしそうな顔で男の手を取って、

林の中から出て行こうとしたのですが、

急に何か恐ろしくなつた様子で男の顔を見ました。

『どうしたんだ。』と男が聞きました。

妻は私の方を指で指して

『あの人を殺してください、



あの人が生きていると私は安心してあなたと行くことができません。どうぞ

お願いいたします、殺してください。』

『あの人を殺してください。』こんな恐ろしい言葉が妻の口から出ることを

信じられる人がいるでしょうか。この言葉が強い強い風になって私を暗い

所へ吹き飛ばしました。あの時、私はもう死んだのかもしれない。」

「けれども、あの男も真砂の言葉にひどく驚いて、何も言えなくなつて

しまったようです。しばらく黙つて立っていました。真砂はもう一度『殺し

て。』と叫びながら男の手を取りました。この時、私は殺されるのだと思

いました。

ところが、男は真砂をとて乱暴に蹴つて倒しました。そして私に言いました。

『どうするこの女、このひどい女、お前の妻だが殺してやろうか。それとも助けてやりたいか。どうしたいか言ってみる。』そう言いながら私の口から木の葉を出してくれたのです。この言葉を聞いて、私はこの男にもいいところがある、今までのことを忘れてやろうと思いました。私たちは真砂に對して同じ気持ちになったのだと思いました。

しかし気が付くと、真砂は何か叫びながら林のむこうへ逃げていっただけです。驚くほど速く走って行ってしまったのです。

男は『これはだめだ、急いで逃げよう。ここにいると今度は俺が危ない。あの女、誰かに俺のことを言うだろう。』と言って、男は私の紐を切ってくれた後で、弓矢を取って林のむこうへ走って消えました。

男がいなくなると周りは急に静かになりました。風の音と鳥の鳴く声だけが聞こえます。それからどこかで誰かが泣いているのに気が付きました。声はどこから聞こえるのだろうと周りを見ましたが、誰もいません。



それは私の泣き声だったのです。しばらくの間、私は我慢をしないで泣いていました。自分が泣くなんて信じられませんでした。侍は泣いてはいけないのです。でもその時は自然に涙が止まるまで泣きました。しばらくして涙が止まると、何か大変な仕事が終わった時のように疲れてしまいました。紐は男が切つて行つてくれたのに、手も足も痛くて立つこともできないぐらいでした。でも手や足の痛さよりも心が痛かったのです。何とか立つて見ると目の前に真砂が落ちていた小さい刀がありました。それを手に取つて、残っている力を全部使つて自分の胸を刺しました。でも痛くなかったんです。痛さも何も感じる事ができませんでしたけれど、ゆつくり熱いものが喉か

ら口が上がってきました。そつと体を横にして静かにしていました。

だんだん胸の辺りが冷たくなってきました。風の音も木の葉の揺れる音も聞こえません。もう鳥の声も聞こえません。

でもとても気持ちがいいのです。

林の上のほうを見ると

青い空が木の枝の間から

見えます。明るく光つて

とてもきれいです。

音は何も聞こえないのですが、



風が吹いて木の枝が揺れています。

私の顔に風が当たって

涼しいのです。だんだん

木の影が大きくなって来て

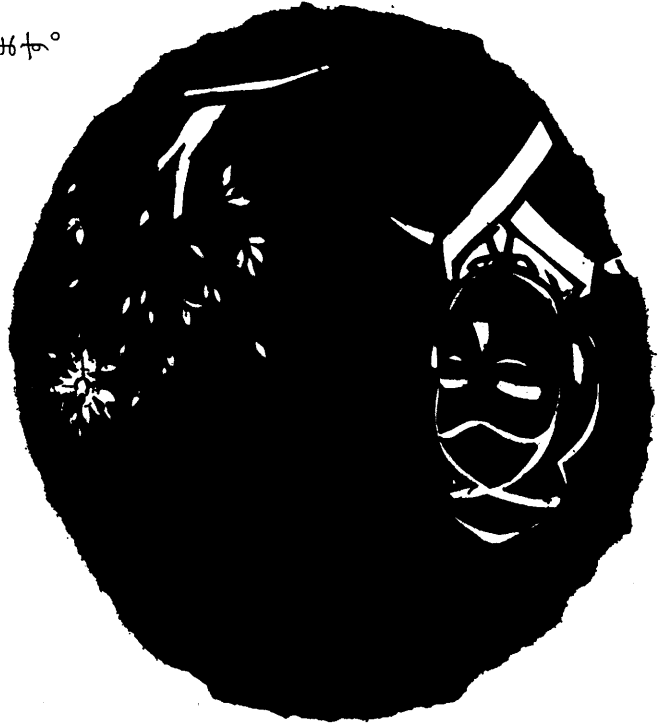
明るい空が少しづつ

暗くなってきました。

もうすぐこの静かさと影が

私を全部包んでしまうのだ

と思いました。



私は死ぬのだと分かりました。

その時、誰かが私の方へ近づいて来るのが分かりました。誰なのだろうと目を開けてよく見ようとしたが、影がすっかり私を包んでしまつて暗くて何も見えません。

その誰かが私の胸から刀を取りました。するともう一度口の中が血でいっぱいになりました。それからどんどん暗い所へ落ちていくような感じがして、何も分からなくなりました。」

ここで巫女は話し終わって、ぱつたりと倒れました。しばらくして起き上がりましたが、番所の侍達がいろいろ聞いても

「私は何も分かりません、何も覚えていません。」と言って帰ってしまいました。

番所は静かになりました。事件のすぐ後には、近くの人が侍の死体や多襄丸を見ようと集まって来たり、ひそひそと話したりしてうるさかったのです。でも今はもうそんな人もいなくなって何もなかったような様子です。

しかし、本当のことはまだ誰にも分かりません。多襄丸、真砂、金沢武弘、この三人の中の誰が本当のことを言っているのでしょうか。一人が本当のことを言ったのなら、他の二人はどうして嘘をつかなければならなかったのでしょうか。それも、「私が殺したのではない。」と嘘をつくのではなくて「私

がやったのだ。」と言っているのです。

多襄丸が本当のことを言っているとしたら、真砂や金沢武弘はどんな人達でしょうか。嘘をついてなにを隠そうとしたのでしょうか。

真砂の話が本当だったら、多襄丸と金沢武弘の話は……。そして金沢武弘の話が本当だったら……。自分の命よりも大切なこと、守らなければならないことは三人にとってそれぞれ何なのでしょう。

暗い林の奥、そして人の心のずつと奥にあつたことは……。

おわり

この日本語版グレイデイド・リーダーはJGRプロジェクトグループが開発した試作品です。販売を目的としたものではありません。

© 2006 by JGR プロジェクトグループ